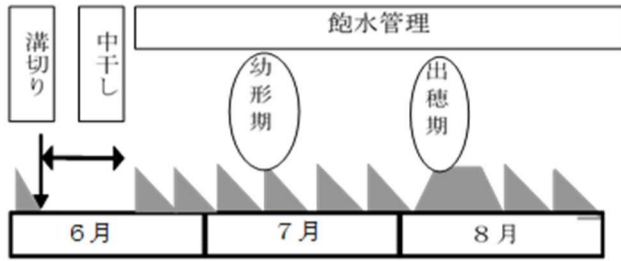


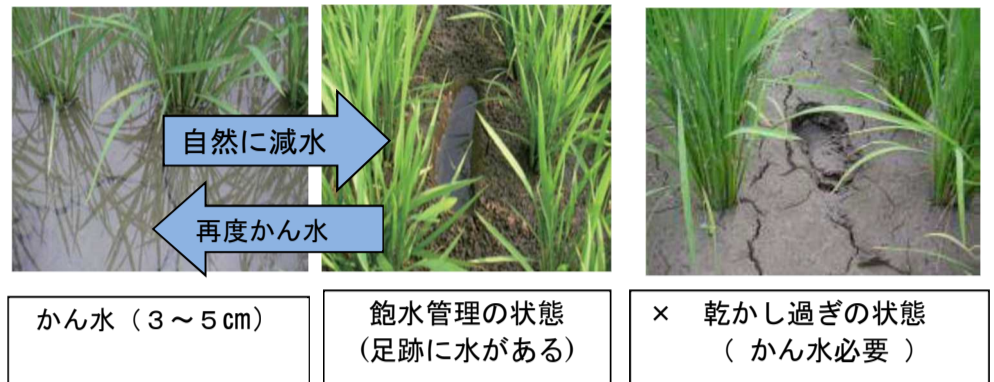
的確な穂肥診断で、高品質安定生産を目指そう!

1 中干し後の水管理

- 中干し終了直後は、浅水の間断かん水を実施し、その後徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行します。
- 飽水管理で、出穂後の根の活力を維持します。



【飽水管理の方法】



2 品種別出穂予想と穂肥時期のめやす(6月17日現在の予想日) ~出穂期は平年並みの見込み~

品種	出穂予想日	1回目穂肥		2回目穂肥		2回合計窒素量 (kg/10a)
		時期	出穂前日数	時期	出穂前日数	
新潟次郎	7/18頃	6/18~6/23頃	25	7/4頃	14	6
五百万石	7/21頃	7/1頃	20	7/9頃	12	1~2
つきあかり	7/21頃	6/21~6/26頃	25	7/7頃	14	3~3.5
わたぼうし	7/24頃	7/2~7/4頃	22~20	7/12~7/14頃	12~10	2~3
こしいぶき	7/26頃	7/3頃	23	7/12頃	14	2
こがねもち	8/1頃	7/14~7/17頃	18~15	7/22頃	10	1~3
コシヒカリ	8/2頃	7/15~7/18頃	18~15	7/23頃	10	1~2.5
いただき	8/7頃	7/13頃	25	7/24頃	14	6
みずほの輝き	8/12頃	7/18頃	25	7/29頃	14	3

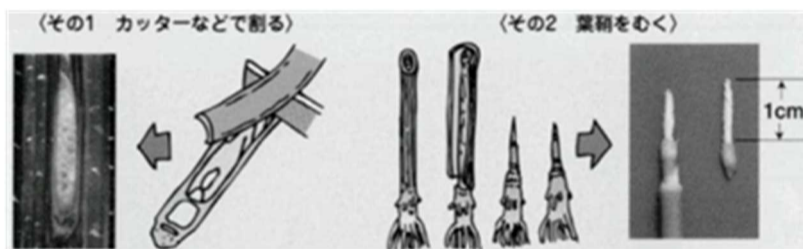
- ◎ 稚苗5月10~15日頃、中苗5月15~20日頃に移植した場合を想定。
- ◎ 今後の天候で前後する場合があります。
- ◎ つきあかりや新潟次郎で穂肥前に葉色の低下が見られる場合は、早めに穂肥を施用する。

3 穂肥診断のポイント ~ほ場ごとに自己診断しよう!~

○ 穂肥は、下記の手法で必ず稲の生育状況を確認し、天候や病害虫の発生状況及び地力等を総合的に判断して決める。

(1) 穂肥診断の手順 (幼穂長で施用日を決め、草丈と葉色で施用量を判断する。)

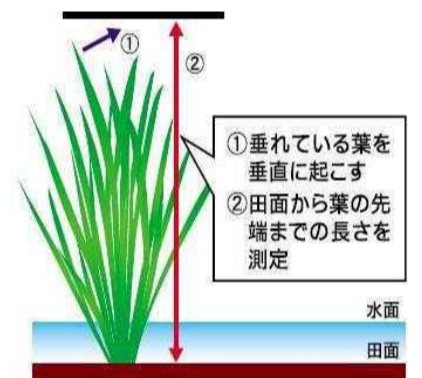
① 幼穂長を測り、出穂前日数を判断する。



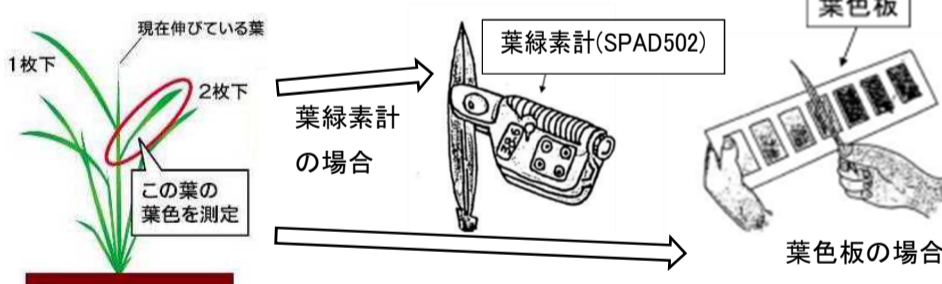
【幼穂長と出穂前日数のめやす】

幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2~0.4	20日
0.5~1.0	18日
4~6	12日
8~11	10日

② 草丈を測る。



③ 葉色(単葉)を測る。



◎ 草丈と葉色を測るときは、水口や畦畔際を除き、ほ場内の生育中庸株で5株程度の平均とする。

(2) コシヒカリの穂肥診断 ~上記の調査結果を基に、穂肥時期及び量を判断する~

【1回目の穂肥時期及び施用量: 幼穂形成期(出穂24日前頃)の生育による診断】

草丈	葉色(単葉)	SPAD値 34~32 葉色板 4.2~3.9	SPAD値 35以上 葉色板 4.4以上
	70~75cm 以内	時期・量とも基準どおり施用 →出穂18日前: 1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 →出穂15日前: 1.0kg/10a
75~80cm 以内	施用量を減らす →出穂18日前: 0.5~0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂15日前: 0.5~0.8kg/10a	
80cm 以上	施用できない	施用できない	

【2回目の穂肥時期及び施用量: 出穂12日前頃の診断】

出穂14~12日前の 葉色(単葉)	出穂10日前の 穂肥量(10a当たり)
SPAD値 32~34 葉色板 4.2~4.5	基準どおり施用 1.0~1.5kg
SPAD値 35以上 葉色板 4.6以上	施用量を減らす 0.7~1.0kg 未満

※2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用する。
※全量基肥肥料であっても、葉色低下が見られる場合は施用する。

(3) こしいぶきの穂肥 ~時期を逃さず遅れずに施用~

【1回目の穂肥時期及び施用量】

時期 : 出穂23日前
施用量 : 1.0kg/10a
※1回目の時期は幼穂形成期なので、幼穂を確認し、時期が遅れないようにする

【2回目の穂肥時期及び施用量】

時期 : 出穂14日前
施用量 : 1.0kg/10a
※低地力地域や後期栄養の不足が懸念される場合は、1.5kg/10a